

と題し、大正大学 心理社会学部 臨床心理学科 教授 玉井 邦夫 氏から虐待が起こる背景についてのお話がありました。



ます。家族を一つのシステムととらえると、それは、夫婦や親子、子どもたち等それぞれが形成するサブシステムから成り立ち、夫婦(親)と子どもの間には、世代の切れ目=世代間境界が存在します。夫婦は、子どもが生まれると両親(父母)の役割も担うこととなりますが、この夫婦間と両親間のコミュニケーションが両方向性を向いていれば、子どもの問題は両親間で、夫と妻、互いの問題は夫婦間で解決することができます。このように家族システムにおいて、役割の適合性、コミュニケーションの相互性、世代間境界の運用、親子相互作用がうまく機能しているのが、健康度の高い家族です。しかし、子どもに障がいがある場合、自分がされてきた子育てができない悲しみ、生活年齢と発達年齢が解離してくる現実等、育児不安によるいろいろなストレスを抱えるようになります。

また、保護者が子どもに接する時は、両親の役割でいることが望まれますが、両親役割や夫婦役割がうまくパートナーシップを発揮できていない場合には、そこで解消されなかった不満や怒りが子どもに向けられることも起こります。仕事の悩みや夫への不満等、夫婦関係で問題解決ができず、親と子の間にある世代間境界を越えて、子どもに当たってしまったり、両親が互いの悪口を言ったりすると子どもがストレスにさらされます。

さらに、外部との繋がりがなく、誰にも相談できずに家庭内で抱え込んでしまうと虐待が生じる危険性が高まります。このように虐待に至る家族システムの病理には、ストレス連鎖の固定化、コミュニケーションの歪み、世代間境界の運用の歪み、家族外ネットワークからの孤立があげられますが、虐待というのは、「家族・親子」であり続けようとする気持ちの現れだ

そうです。虐待という親子関係には、そのような関係に陥っても家族でいようとする姿があるということで、だからこそ、虐待臨床の中核は「ケア」であると話されました。

一方で、障がい受容の視点から考えると、我が子に障がいがあると告げられた時は、茫然となり、理想としていた子育てができないという喪失感が生まれ、障がいを認められない否認から診断の拒否や心理的なひきこもりになったり、普通に近づけるのではとの発想から子どもに対してスパルタになることがあります。

また、障がいがあるから仕方がないと自分の子どもの力を育てるのをやめ、諦めからネグレクトになることもあります。障がいを受け入れても支援の排除による囲い込みや「保護者」をアイデンティティとしてしまう(この子がいなくなれば自分の存在価値がなくなるという思い)状態になると、それは支援や援助の拒否となり自立に必要な支援が行われなくなります。

虐待は、殴る蹴るというだけでなく、子どもの成長を損ねる行為も同等で、大切なのは、子どもが自分の人生に出ていける道筋を作ることができるかどうかだと言われました。子どもと上手く関わっているということは、受容ができていることだそうですが、障がい受容にゴールはなく、波状に続く終わりのない課題であり、障がい受容への支援は、具体的な「うまくいく方法」として課題設定されていることが必要だと話されました。

午後からはシンポジウムがあり、上智大学 総合人間科学部 社会福祉学科 教授 大塚 晃 氏からは地域における一貫した支援として、相談支援では、自分にとってワクワクするような支援計画を、個別支援計画は将来希望がもてるようなものを作成することが大切で、内容が漠然としたものは意味がないと話され、放課後等デイサービスの問題点についても言及されました。

2人目の栃木県手をつなぐ育成会 会長 小島 幸子 氏からは、26歳になられる重度の知的障がいがある自閉症の息子さんと歩んできた道のりや育成会の必要性と今後の展開についてのお話があり、若いお母さんの伴走者になりたいと抱負を語られました。

最後に、文部科学省 特別支援教育 調査官 田中 祐一 氏は、特別支援教育の現状と課題について、学習指導要領の改訂を中心にお話をされ、教育と連携するためのヒントとして、できる限り最新の情報を収集して、誰に伝えるのかを(教員に、校長に、教育委員会